

建設産業委員会行政視察報告書

1 視察期間

平成24年11月5日から平成24年11月7日まで 3日間

2 視察都市

- (1) 岩手県奥州市
- (2) 秋田県仙北市
- (3) 岩手県雫石町・雫石商工会

3 参加者

山田安邦委員長、松野正比呂副委員長、寺田幹根委員、八木正弘委員、
鈴木啓文委員、高梨俊弘委員、八木啓仁委員、岡 實委員、小木秀市委員
同行 飯田剛典農林水産課長
随員 和久田徹主任

4 視察事項

- (1) 市・町の概況について（2市・1町）
- (2) 景観行政について（奥州市）
- (3) 観光行政について（仙北市）
- (4) 中心市街地活性化策について（雫石町・雫石商工会）

5 考察

次のとおり

奥州市 人口 124,605 人、面積 993.35k m² (平成 24 年 4 月 1 日現在)

1 景観行政について

(1) 概要

奥州市は平成 18 年 2 月、水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村が合併して誕生した中核都市である。

奥州藤原文化の源流である歴史文化景観特性や北上川に沿って広がる農村景観特性をはじめ、自然景観にも恵まれた土地柄と活発な住民活動による景観形成努力などを背景に、旧市町村時代から景観形成の取り組みが進められてきた。

こうした取り組みは、合併を機に「奥州市の優れた景観を守り、育て、つくる条例」として統合され、平成 20 年 8 月には、平成 17 年に施行された景観法に基づく景観行政団体となり、さらに平成 23 年 7 月に「奥州市平泉文化^{ようらん}揺籃の地景観計画」の策定へと引き継がれている。

「奥州市平泉文化^{ようらん}揺籃の地景観計画」は、「慈しみ育まれた農村・自然・歴史景観の保全と活用」を理念とし、基本方針を「農村景観の保全と育成」、「自然景観の保全と育成」、「歴史文化景観の保全と創造」、「景観形成の啓発」の 4 点に定め、景観計画区域を選定し、さらに、区域を「歴史景観地区」「風土景観地区」、「一般景観地区」に区分することにより、地区の特性に合った取り組みを進めるものとなっている。

景観計画区域では、建物の新築、工作物の新設、土石の採取などについての景観形成基準を定め、基準に沿った行為と届け出を義務づけている。また、景観重要建造物や重要樹木の指定、屋外広告の表示等の制限、景観農業振興地域整備計画の策定、景観重要公共施設の整備についても基本的な方針を定めるとともに、景観保全のため、建築物や工作物の外壁の色彩基準なども定め、景観まちづくりを推進している。

計画策定にあたっては、住民説明会やパブリックコメント、シンポジウムを通じて理解促進と意見収集を進めてきたが、景観計画区域の建築物や工作物の届け出件数は平成 23 年 10 月から平成 24 年 10 月までの 1 年間で 18 件、補助金申請は 1 件と利用は少なく、課題として景観政策の周知と地域住民の理解をさらに進める必要性を挙げている。

今後は、平泉文化の地域を重点地区として包括した、市全域の景観計画を平成 23 年度から平成 25 年度までの 3 年間で策定する予定であり、市民ワークショップの開催やワーキンググループ員会議の開催などにより市民を巻き込んだ計画立案と景観啓発活動の促

進を考えている。

(2) 考察

最初に、景観まちづくりの基本についての説明があった。景観まちづくりとは「人々の暮らしと調和した、暮らしやすいまちを守り、つくり、はぐくむこと」、「地域らしさを守り、はぐくむこと」、「市民、事業者、専門家等および行政の協働により取り組むこと」、「まちづくりとして、時間をかけてはぐくむこと」の4点であるとのことであり、地域づくり・まちづくり協働事業の一環として、景観計画を位置づけていると感じた。

奥州市では、歴史文化的に重要な背景を持つ地域を景観計画区域とし、観光資源としての活用を目指しており、世界遺産の平泉に隣接している重点地区の方向性は明確である。しかし、市全体の景観行政については、市民とのコンセンサス形成も含め課題認識をしていることから、磐田市の景観行政も、重点を明確にしためり張りのある計画が必要と考える。

仙北市 人口29,760人、面積1,093.64k㎡(平成24年4月1日現在)

1 観光行政について

(1) 概要

仙北市は秋田県の東部中央に位置する自然、歴史、文化の観光資源を有した市である。日本一深い田沢湖など豊かな自然が息づく田沢湖地区、武家屋敷通り周辺を観光の軸に桜並木、お祭りなど歴史と文化のまち角館地区、美しく素朴な農山村風景が広がる西木地区の3地区に大きく分かれ、それぞれの特徴を生かした観光行政を目指している。観光関係の雇用者数は周辺都市が5%程度であるのに対し、仙北市では9.8%であり観光行政のよし悪しは雇用にも大きく影響している。

しかし、観光客数は平成16年の630万人をピークに、減少傾向が続いている。とりわけ、4月、5月の桜まつりシーズンに年間観光客数の約半数である300万人が訪れるのに比べ、12月～2月の冬季は、その10%にも満たない状況にある。火ぶりがまくらなどのイベントで小正月の集客を狙うものの増加傾向につながらないほか、スキー客の極端な減少があり、冬季集客は課題となっている。

また、秋田新幹線による遠方からの利便性は高まったものの、田沢湖地区、角館地区、西木地区の観光地を結ぶアクセスが不十分であることや情報発信の不足も集客の課題で

あると認識している。また、ここ数年の傾向として宿泊客が減り、日帰り・通過型の観光が増え、宿泊施設の少ない角館地区においては、平均滞在時間が1時間に満たないという統計があり、観光消費額の増加を見込むためにも、宿泊型、連泊型の観光を推進する必要があると考えている。

そうした中で、平成21年に韓国ドラマ「アイリス」が放映されて以降、韓国を中心とした外国人観光客が増加している。田沢湖が台湾の高雄にある「澄清湖」と姉妹湖提携をしていることも活用し、今後は国際観光にも力を入れる予定である。

なお、視察目的であった観光客1,000万人を目標にしたテンミリオン計画は、現市長のマニフェストにおいて、平成18年に記録した集客数の観光客数600万人、宿泊客数80万人に変更し、県外客、外国人旅行者をターゲットに誘客宣伝活動を積極的に展開していくこととしている。

(2) 考察

仙北市は、自然の景勝地である田沢湖地区、歴史ある城下町の角館地区、農村風景が残る西木地区と観光資源に恵まれた地域だが、景気の低迷や震災の影響で客足は鈍っている。そうした中、課題を明確にし、それぞれの対応策を検討しながら観光客数の増加による地域の発展を推進している。山間地という事情から観光産業に経済・雇用を頼っており、磐田市とは観光に対する取り組み方は大きく異なる。しかし、現実的な目標を設定し、関係者の連携により協働の取り組みを進めているところは、大いに参考とするところである。

なお、滞在中に気づいた点として、角館駅前商店街では残念ながらシャッターが下りた店が多数あるなど寂れており、武家屋敷周辺と対照的であったことが印象に残る。秋田新幹線が開通したとはいえ、車による観光が主流になっていることを物語っているものと考えられ、全国的な課題と強く感じた。

雫石町 人口18,108人、面積609.01k㎡(平成24年4月1日現在)

1 中心市街地活性化策について

(1) 概要

雫石町は、盛岡市の西に位置する東西24km、南北40km、面積609km²と大変広い町である。岩手山をはじめ1,000m以上の山々に囲まれ、郊外には小岩井牧場を有する農山村

地域が広がる一方、雫石駅のある中心部は商店街が並び、交通の要所となっている。

旧国道46号線沿いにある中心市街地、よしゃれ通り商店街は、昭和57年のバイパス完成により交通量が大幅に減少、さらに郊外型のショッピングセンターの立地も相次いだことで、買い物客が大きく減少した。また、高齢化による担い手不足などの問題もあり、中心市街地の衰退に危機感が高まったことから、平成16年3月、町として中心市街地活性化基本計画を策定、翌17年3月には雫石商工会がTMO構想を策定し、商店街の活性化の推進に取り組んできた。

このTMO構想は「人材を育てる：地域住民全体の啓発」「商店街の共同イベントを開催：軽トラ市」「多機能複合施設を整備し観光客を取り込む」の3つの柱から構成され、重点事業として軽トラ市の開催を企画、推進してきた。

この軽トラ市は平成17年7月に第1回を開催してから、毎年5月から11月までの毎月第1日曜日を基本に50台～60台の規模で開催しており、当初はほとんどのシャッターが閉まったままであった状況が、現在では多くの商店が軽トラ市に合わせて営業するようになったとのことである。

課題は7年が経過し、元祖軽トラ市として定着したものの商店街の規模が小さく、また高齢化のため商店会の機能がないため、商工会が事務局としてかじ取りをしなければならぬ状況が続いており、商店街の意欲をさらに高める工夫が必要なことなどである。

また、この軽トラ市は平成23年に国土交通省の全国地域づくり推進協議会会長賞を受賞するなど、高く評価されているが、さらに活性化を図るべく、全国軽トラ市サミット開催の実現に向けて全国各地の軽トラ市とのネットワークづくりを進めている。

なお、視察研修の説明はTMO構想の3つの柱の一つである多機能複合施設「しずく館」で行われた。しずく館は国土交通省のまちづくり交付金事業として進められ、延べ床面積約360㎡に郷土芸能伝承公演室「ステージと観客席のある小ホールのような設備」や地場産品販売室などを備え、舞台公演、集会、お土産品の購入、食事などが可能な施設であり、商店街活性化の拠点となっている。

(2) 考察

雫石町は、平成17年7月、日本で初めて軽トラ市を開催した元祖軽トラ市の町である。商工会を中心に、多機能複合施設「しずく館」や駐車場の整備にとどまらず、ワークショップなどでソフト事業の検討を進め、朝市の開催や空き店舗対策のほか、キーマン・

リーダーの育成を積極的に推進している。まだまだ課題が多いということであるが、7年間の努力を継続しながら着実に商店街の活性化を進めているところは、磐田市としても参考にすべきであり、現在の軽トラ市を一過性のものに終わらせず、商店街や地域の産業界との連携を深めながら、地道に育てていくことが大切であると強く感じた。

また、再来年には全国軽トラ市サミットの開催を予定しているとのことである。全国にネットワークを広げるよい機会であり、磐田市もぜひ参加したらどうかと考える。